考える愉しさ

梅原猛対談集

新潮社

考える愉しさ

梅原猛対談集

新潮社

考える愉しさ
—梅原猛対談集—
定価 950 円

発　行　昭和50年 1 月30日
4　刷　昭和50年 5 月10日
著　者　梅原 猛 ほか
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社 新潮社
〒162 東京都新宿区矢来町71
電話　業務部 (03) 266-5111
　　編集部 (03) 266-5411
振替 東京 4-808
印刷所　株式会社金羊社
製本所　大口製本株式会社
© 1975, Shinchosha. Printed in Japan.
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

第一部

わが思索のあと　対談〈小潟昭夫〉〈梅原　猛〉　11

○『闇のパトス』を生む情感　○日本の「笑い」の研究　○小林秀雄との方法の違い　○学問と想像力　○情熱と認識とのバランス　○なぜ書くか——作家の中の疎外感　○闇の中の輝き

人間のおもしろさ　対談〈湯川秀樹〉〈梅原　猛〉　31

○「奇」の意味するもの　○事実から組立てる論理　○「けったいな人間」への関心　○純粋であることの「しんどさ」　○統一像求めるエロス　○ロマンティックな時代　○文化における醗酵体　○指し切ってはならぬ人生　○大物をつぶす業績主義　○楽しむことの大切さ　○興味深い人間の二面性　○科学をささえた情熱　○自信と直観からの出発

デーモンを語る　対談〈小松左京〉〈梅原　猛〉　54

○文治法治の思想　○想像力の復権　○仮説を欠いた日本史学　○人間世界の縦の深さ　○なぜという問いを

歌舞伎の発想　対談〈桑原武夫〉〈梅原　猛〉　62

○歌舞伎とは……　○あさはかな近代主義　○非合理の世界　○怨霊の東西　○ハワイでの『鳴神』

第二部

出雲神話の謎　対談〈上田正昭〉〈梅原　猛〉　73

○歴史学の空白　○本居宣長の評価をめぐって　○津田史学の遺産　○出雲神話への疑問　○『記紀』の世界と『風土記』の世界　○出雲の沈黙の意味するもの　○『記紀』と宗教イデオロギー　○元明と不比等――女帝の血脈　○元明・持統・不比等　○『記紀』の神神と藤原氏　○太安万侶の背後関係　○神道思想の源流――魂ふりの伝統

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

日本学事始

対談〈上山春平〉〈梅原　猛〉

110

○日本で哲学するということ　○イメージのふくらみを欠く国文と神祇の古代研究　○柳田・折口学と日本の思想的伝統復元の可能性　○日本学の方法――外来文化吸収プロセスの独自性　○世界学をふまえた日本学――「虚の文明」の仮説　○藤原政権を支えるイデオロギーとしての『記紀』神話　○強大なる皇権の幻想――建前とその実利的変質　○道教と儒教でデザインされた日本の神話　○策謀の多すぎる英雄たちと藤原家のマキャヴェリズム　○壬申の乱をどう見るか――官僚組織の陥穽　○天武の国家デザインをすりかえた持統の血の原理　○アマテラスはいつつくられたか――伊勢皇大神宮の前身　○出雲神話の再編集と古代の国家神道政策　○日本学の課題――東西思想のるつぼとしての日本

『万葉』の世紀

対談〈池田弥三郎〉〈梅原　猛〉

155

○『万葉集』巻一、巻二の深さ　○怨霊の命日は三月十八日　○鎮魂歌集としての『万葉』　○二つの極点、人麿と家持　○桓武天皇にとりついた怨霊　○『万葉集』の読み方　○自分の運命を見た凄惨な歌

『万葉集』をどう読むか　対談〈大岡　信〉〈梅原　猛〉　174
○古代再考　○中世を起点として　○編集するという行為　○島木赤彦の死　○叙景と鎮魂　○挽歌から哀傷歌へ

第三部

東洋思想の復権　対談〈谷川徹三〉〈梅原　猛〉　201
○世界を支配する科学技術文明　○東洋と西洋における自然観の違い　○政治的反逆から文明の反逆へ　○現代の思想家に課せられた仕事　○仏教思想から新しい歴史観　○東洋の宗教こそ新しい思想形態

親鸞を語る　対談〈武内義範〉〈梅原　猛〉　215
◎第一部　日本の哲学と仏教思想　○清沢満之の宗教的人格とその影響　○西田哲学のはじめ　○和辻哲郎の仏教哲学　○田辺哲学の経歴——道元と親鸞　○日本哲学における「自力と他力」とその問題の将来性　○空海の再発見　◎第二部　親鸞の人格と思想　○『教行信証』の論理　○法然と親鸞　○『選択集』と『教行信証』　○親鸞の見た『涅槃経』と『華厳経』　○世界と神々の肯定　○『歎

異抄』について　○『歎異抄』の背景　○親鸞の生き方に学ぶ

西洋が東洋に学ぶ時代　対談〈司馬遼太郎〉〈梅原　猛〉　252

○水平思考法は逆輪入　○坊さんは柄が悪い　○すごい信長の無神論　○近代を開こうとした信長　○これからは内にこもる時期　○日蓮宗は「生の原理」　○創価学会これからの課題　○知性かエネルギーか　○小田実は昭和の日蓮？

近代の終焉と意識の変革　対談〈宮脇　昭〉〈梅原　猛〉　268

○文明の危機とマスコミ　○生命集団と環境の崩壊　○衆生の一員としての人間　○計量化不可能なものの再発見　○自然の崇拝としての神社　○エコシステムの原理——生物共同体——　○生と死の問題——人類社会の死——　○公害病と科学の功罪　○意識の変革と総合時代　○分析思想と総合思想　○技術の過信と自然の破壊　○人間も生命集団の一員　○微妙な生活環境のバランス　○公害に対処する仏教思想

あとがき　梅原　猛　288

装幀　辰巳四郎

考える愉しさ—梅原猛対談集—

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

第一部

わが思索のあと

小潟昭夫
梅原猛

『闇のパトス』を生む情感

小潟　最初、梅原さんは実存哲学の方面をなさっていらしたと思うんです。たとえばハイデッガーとかキェルケゴールの辺の不安の哲学ですね。そして、処女作の『闇のパトス』に象徴的にその後の仕事の展開が包蔵されているように、ぼくは感じました。そこで、ふたつのことが考えられると思うんです。ひとつはあの論文の中にあるコンスタントなものが、いまだにいろんな作品において見られるということと、もう一つは、あそこの背後にかくれているものが発展して出てきているということ。はじめのコンスタントなものというのは、『古典の発見』や『水底の歌―柿本人麿論―』の中にも出てくる、批評の方法自体について。これは「太陽神話」とでもいうんですか、太陽がのぼり、夕暮れという昼と夜の境目があって、最後に闇にいくという過程、その中に思想の原型があるんじゃないかというのがぼくのひとつの考え方です。それからもうひとつは、やはり戦争体験が非常に重要じゃないかと思います。戦争体験によって梅原さんが得たものと失ったもの、その問題から伺いたいと思うのですが。

梅原　むつかしいね、どうも……。といいますのは、「太陽神話」というふうに言われたんですが、私の作品に対してそういう批評はあなたが初めてだと思うんですよ。そういうことをずっとあとから検討したいと思うんですがね。一つは私が二十五歳のときに書いた『闇のパトス』という

論文ですね。あれはたいへんアカデミズムでは評判の悪い論文でしてね。あの一作のために、私は京都大学から追放になったというような（笑）論文なんですよ。

実はやっぱりいままでのアカデミーの哲学というのは、大体が西洋哲学の紹介、それで京都大学にもそういう傾向が強くて、論文というものはやはり西洋の哲学書を引用して、そしてその解説を書いて、九十パーセントまでは解説で、あとの十パーセントが、だけどこれはこうじゃないかという、そういう論文が日本では哲学の論文とされていたわけですね。私だって、そうなまけ者じゃなかったんですから、そのくらいの論文をつくろうと思えばつくれるんですけど、私の中にあのころ非常に大きな不安がたまっておりまして、大げさにいえば、生きるか死ぬかといういろんなことがあったんですけれども、そういう問いを自分の中に問わずにはいられなかったんですね。そのときに私が読んだ多くの西洋の哲学書のことばは全部背後に退きまして、何か自分の言いたいことだけが前に浮かんできた。そして、ああいうのを書くことによって、何か逆に生きるよすがを得た。すでに生きるか死ぬかという決意の中で、生きるというふうに自分が一歩進んだときにやっとあれが書けたわけですね。だから、「太陽神話」という比喩を使えば、ちょっと向こうの明け方の何かが見えたような、あるいは見ようとしている時期に自分と格闘して闇の暗さというものを振り返った、そういう作品だと思うんですよ。それであなたがおっしゃったように実存的なものという、そういうのがおそらく私の一生をやっぱり支配しているものだと思うんです。それでずっと私の一連の作品でいろいろ変わってきましたけれども、やはりいつもそれが、私が帰る原点みたいなものですね。

だからもうひとつ、おそらく私の作品で、私自身が初めて別の形で自分の思想をはっきり語り得たというのは、『地獄の思想』じゃないかと思うんですがね。そこにも『闇のパトス』の、どこかこう形は違うけれど、同じような繰り返しがある。そしていま現在の『隠された十字架—法隆寺論—』以後のものですね。これは著しく情念が社会化されていますね。非常に歴史化されて、闇を見る眼といいますか、歴史の闇を見る眼が客観的になっているけど、だけどやはりどっかで同じ情念が繰り返されていると思いますね。

小潟　『地獄の思想』の最後に、太宰治をあげておられたと思うんですけれども、あの中でやはり梅原さんご自身が京都大学の哲学科の三年生でいらしたときに、ちょうど太宰治が自殺して、そのとき太宰の気持ちがよくわかったと書かれているんですが、その辺とどうもつながりそうですね。

梅原　その辺が大体『闇のパトス』のようなものを書かねばならぬ情感の世界ですね。だから日本の作家として、私がそのころいちばん影響を受けたのは太宰と坂口ですね。これは皆さんの時代にはちょっと想像つかないかと思うんですが、当時は坂口をトップバッターとして、太宰のほうが二番バッターみたいな感じでしたけど、坂口と太宰が当時の青年に熱狂的に読まれた様子はたいへんなものだったですよ。そして底を流れるものは一貫してある種のニヒリズムですね。それがちょうど私の青春時代にぶつかるわけです。それで、そういう一種のニヒリズムの根底にあるものは何かというと、あなたがさっきおっしゃった戦争体験がどうしてもある。

日本の思想界で戦争体験というのは相当に問題にされてもいいんじゃないかと思うんですよ。たとえていうと、吉本隆明さんが、私なんかとはだいぶ思想が違うと思うけれども、共通の何ものかを感じますね。戦争を経てきた世代と、あるいは青春のただ中を戦争におくった世代と、すでに人間形成ができたのちに戦争へ行った世代の違いというのがありますね。それはつまり価値感の形成される過程に戦争というのが入ってきた世代と、それからもうすでに価値感が形成されたのちに戦争へ行った世代と、だいぶ私は違うんじゃないかと思うんですけれどもね。

それが何だろうかというと、これは大きな問題だと思うんですけれども、やはり私の場合は死という問題ね。これは近代思想ではほとんど隠れていた。ヨーロッパの近代哲学には死という観念が欠如しているね。それから、日本のいわゆる近代派の考え方にはやはり死という概念がない。死というようなものを生の力のいちばん強い時代に感じなければならなかった。生の中に浸透している死というものを肌で感じ、この目で見なくちゃならなかった体験というものはひじょうに大きい。そしてそのような大きな体験に比べれば、すべてのものはいわば、実に浅薄だ。そういうふうにぼくらは感ぜざるをえなかった。ぼくらの体験の基礎に戦争がある。

もう一つは、ある種の社会的なものへの関心ね。これが従来の思想には欠けていたね。だから死の体験と同時に、一種のファシズム体験というかね、そういうものが、大きく私自身の思想を変えたでしょうね。それ以前は、私は西田哲学というものに百パーセントの共感をしていたのですが、それ以後私はやはり西田哲学に対して、ある種の疑問を感じはじめた。

小濱　その西田哲学に疑問を持ったということは、つまり西田哲学というのは一種の観念哲学であって、日常性からわき上がってくるところの哲学ではなくて、むしろ絶対矛

盾の自己同一とか、自覚における直感と反省とか、そういう一つの観念の極北といってもいいと思うんですけれども、そういったものに対する批判がひじょうに大きいということでしょうね。

梅原　そうですね。そしてその観念の世界の中で、西田哲学のひとたち、これは右派の人ですけれども、ひじょうに簡単に戦争肯定に結びついたということですね。そして、そういうようなひとたちの著書を読み、観念の世界で自分を武装して自分の死というものを自分自身に納得させて、ぼくらは戦争に行った。そして、多くの人は帰らずに亡くなってしまった。そういう観念によって一人一人の死を、何かこうほんとは死にたくない死をあきらめさせるというような、そういう哲学に疑問を感じはじめた。観念ではなく事象につけという考え方を戦後強くもったのである。ただ、唯物論というものと、ちょっと違うけどね、何か現象があるわけですよね。そこから始めないような哲学というのは、あまり信用できないんじゃないかと肌で感じたわけですよ。

だから、これはやはりたとえていうと、西洋のハイデッガー、キェルケゴールなんか見るとね、実存哲学だけど人間の情念というものをじっとみつめているわけですね。ありのままの情念を分析しているわけですね。ところが、そういうあるがままのものを見ていて、そこから何か哲学が出発したのじゃなくて、最初に自分の中に、ある一つの観念があって、その観念が自己増殖していく、そういう哲学に対してぼくは、たいへんそこで不満を持ちましたですね。

日本の「笑い」の研究

小潟　いま言われたことは、結局、物に対する考え方ですね。たとえばマルクス主義なんかの持っている物質観と、ハイデッガーの実存的なものを比較して、梅原さんがハイデッガー流の実存主義のほうに向かわれたということは、いわゆるマルクス主義などの組織とか社会的なものではなく、むしろ人間を見るほうに向かっているんじゃないかと感じるんです。

梅原　もちろん、最初はそうだったんです。だけど、一時それだけでは人間の見方としては不充分であると思いましてね、そしてマルクス主義にたいへん興味を持った時代があるんですよ。だから、いまのあなたのおっしゃった『闇のパトス』を書いて、あれで光を見た。その辺からだんだんマルクス主義に引かれ出したわけですよ。そして、一時は非常にマルクス主義に近いところまで行ったんですけれども、どうしてもすでに世界はマルクスによって解釈されたので、もう世界の秘密はすでに解けたんだと、あとはマ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.